

宿谷氏の賦

復刻版

毛呂山の名族
宿谷氏の事績

山口満

発刊に寄せて

毛呂山郷土史研究会 杉田鐘治

山口満さんとは五十年程の親交でありました。満さんは故事にくわしく、急逝された事に改めて毛呂山町では大きな宝物を失った思いがあります。

満さんとは近在の遺跡等と同行した事が数多くあり、特に刀剣や中世城館跡に造詣が深く、多くの山城にも同行しました。

大づく山城や竜ヶ谷山城、宿谷氏に関連する宿谷の宿谷氏館跡、大谷木の宿谷氏城館跡、葛貫の宿谷氏館跡、宿谷の山中の城館跡、宿谷氏に関わる大崖城跡などがあり、それらの城館跡の堀や土塁などの防備の状態等語り合い、そして各城館跡の復元俯瞰図等の作成に当り助言をいただいた。

「満さんは晩年「宿谷氏の賦」の集大成に向って、いよいよという所まで来て出版する事を楽しみにしておられた。

此度弟さんの手により出版の運びとなり、満さんもさぞ喜んでおられる事だろう。

満さんとは毛呂山町の旧公民館で町の有志による刀剣展で初めて知り合ったのであるが、正義さんによると昭和三十一年、日本橋の高島屋での名刀展に兄弟らで行ったとの事に驚いた。私は当時文京区に住し学生であったが同展を見学し、黒田節で知られる名槍日本号や正宗、村正、国広（堀川）等の刀剣の印象が今も目に焼きついている。展覧時、見学者はまばらであつ

たが、あの時に満さん、達夫さんたちがいたのかと思うと不思議な縁が感じられる。達夫さんも刀剣研磨を研究され、たびたび伺ったが、満さんを兄貴、兄貴といていた達夫さんは早世されたが出版を喜んでいる事と思う。

刊行にあたったのが弟の正義さんであり、なによりの事とお喜び申し上げます。

平成二十五年十月

柘岳山口満大人の事

毛呂山町文化財保護審議委員長 内野 勝裕

柘岳山口満大人が、幽明界を異にされた。誠に残念の外言葉がない。優れた歴史家を失い大きな穴が空いてしまった感じである。山口さんは何時も、日本史の大きな流れの中で、地域の歴史を捉えておられた。そして、これほど見事に歴史と伝承を融合させた文章を書いた人を知らない。「大蔵館の合戦と宿谷氏の事」などは、正にその白眉である。

山口さんは常に、宿谷氏の研究は、ライフワークだと言っておられたが、言葉通り『あゆみ』（毛呂山郷土史研究会報）に、次々と宿谷氏の研究である「宿谷氏の賦」を発表された。私は『あゆみ』が届くと、山口さんの文章を真っ先に読んだ。そしていつも、期待を裏切らない新鮮な研究に驚かされたものである。ところで、「賦」とは「思うことを述べる。詩を作る」という意味であろうが、山口さんの文章は、実に一編の叙事詩を読むような心地よさを味わせてくれた。この連作が「町史外宿谷氏の賦」で始まっているように、山口さんは恐らく『毛呂山町史』の「中世」に何か物足りなさを感じておられたような気がする。また、毛呂山町歴史民俗資料館の常設展示に、宿谷氏の歴史が全く触れられていないのを常々嘆いておられた。それほど長い間、宿谷氏の研究に取り組んでこられた山口さんのエネルギーは、宿谷氏に対する愛着はもとより、心底にあったこうした反骨心に支えられていた一面もあつたような気がするのである。

山口さんは、「先生はよ、うちの舎弟と同級だからな」が口癖で、私は大変かわいがって戴いた。「先生」というのは、当時私が高校の教員をしていたことによるらしいのだが、実は山口さんこそが、私の先生であったのである。山口さんには、実に多くのことを教えて戴いた。考えて見れば、私は何時も山口さんの後を追いかけていたような気がする。私が山口さんにご教示を賜ったことは、すなわち山口さんの中世史(或いは近世史)の研究史上における業績でもある。いまその一端を列挙してみたい。

- 一、今まで誰も取り上げなかった葛貫別当能隆(河越重頼の父)に光りを当てたこと。
- 一、宿谷氏が近世初期以前は「宿屋氏」を称していたこと。
- 一、宿谷氏と北条得宗家の関係を考察。
- 一、宿谷氏と日蓮上人の考察(鎌倉の日蓮宗光則寺で宿谷光則木像を発見)。
- 一、宿谷氏の城館跡の考察。
- 一、大谷木原合戦伝承を毛呂合戦の前哨戦と位置付けたこと。
- 一、竜谷山城を毛呂氏の詰の城と指摘(落城説を肯定する)。
- 一、山根神社の御神体、八幡神像(元久二の紀年銘がある)を『埼玉史談』の口絵に紹介。
- 一、旗本宿谷尹行修復奉納の「弘法大姉御自筆之御影」等を鳩山町大豆戸の真光寺で発見。
- 一、歴史画家岩沢琢堂を世に出したこと。

あえて十項目にとどめたが、読者諸氏は本書によって、さらに多くの歴史発見をされるに違いない。

また前著『折々の言の葉 毛呂山歴史随想』に収められている歴史随想にも優れた作品が多

い。特に歴史民俗資料館祭りの記念講演で発表された「曾祖母が語った飯能戦争」を拝聴した時の感動は、今も忘れることができない。山口さんの話に引き込まれ、学習室は、いつぱいの聴講者の熱気で満ち溢れていた。振武軍の勇士甲源一刀流の使い手高麗宿の杉山銀之丞や本町葛貫の宿谷数馬などの存在を知ったのもこの時である。安政江戸大地震で、岩沢（大谷木地区）の山が崩れた話も山口さんから得た情報であった。

とにかく、前述したように、山口さんからご教示を賜ったことは、数え切れないほどたくさんある。山口さんが我が家に見えたことも時々あったが、私は色々な質問を持って山口邸へしばしば邪魔したものである。何時も快く迎えて下さり、事務室でしばらく歓談して帰ったことが懐かしい。ときには、床の間のある部屋で家宝の「向かいの虎」や琢堂の「菅原道真観梅の図」を見せて戴いたこともあった。しかし、刀剣の話は、私が興味が無いと思われたのか、ほとんど話されたことが無かった。ただ、宿屋太郎勝平所持銘の刀の話だけは、何度もした記憶がある。私は失礼にも電話などしないで突然訪問することの方が多く、ある時は縁側で奥さんの膝枕で気持ちよさそうにうたた寝しているのを起こしてしまったこともあった。お土産に自家産の唐茄子や真桑瓜を頂いて帰ったこともあった。真桑瓜は、少年の日の味がした。『折々の言の葉』が神田神保町の三省堂書店に並んでいることを、電話で告げたら、恥ずかしそうな感じで喜んでおられた。最後に山口さんに直接ご指導戴いたのは、山根六角塔婆の旧在地に案内してもらったことである。文化財保護審議委員会の文化財調査の折りであった。いくら書いても、山口さんとの思い出は尽きない。

私は、郷土史家という言葉が大嫌いで、そう呼ばれないように努力しているが、なかなか大

変である。山口さんは、史観という言葉をしばしば口にされていたが、初めに述べたように山口さんの歴史の見方は大きい。哲学があるのである。何時も吉川弘文館の歴史文化ライブラリーなどが事務室に置いてあり、新しい学説に絶えず目を通しておられたようであった。私も山口さんを見習い、残された時間を可能な限り歴史研究に努めていきたいと思う。

この度、畏友山口正義君が令兄の小祥忌にあわせて『宿谷氏の賦』を編集・上梓されるという。同君から何か一文を添えて欲しいとの依頼に、纏まらない駄文を連ねてしまったが、郷党の歴史家椋岳山口満大人は、この『宿谷氏の賦』によって、これからも永遠に生き続けるであろう。

平成二十五癸巳年十月

合掌

宿谷氏の賦◎目次

発刊に寄せて 1

柘岳山口満大人の事 3

宿谷氏の賦 11

一章 町史外宿谷氏の賦	13
二章 宿屋氏差料の事	30
三章 宿谷地藏尊及び江戸宿谷氏の事	47
四章 大蔵館の合戦と宿谷氏の事	63
五章 二俣川合戦と宿谷氏の事	81
六章 江戸宿谷氏人々の事	96
七章 森田宿谷氏の事	108
八章 宿谷氏、幻の城の事	120
九章 宿谷氏と日蓮の事	139
十章 宿谷氏、葛貫居館跡の事	155
十一章 宿谷氏伝承あれこれの事	172
十二章 宿谷氏伝承と日蓮宗門の事	179

十三章	宿谷氏七騎筆頭、山口氏の事……………	187
十四章	都下、宿谷氏事蹟伝承の事……………	194
十五章	大豆戸真光寺、宿谷氏資料の事……………	200
十六章	北條得宗家と宿谷氏の事……………	209
十七章	鎌倉、行時山光則寺の事……………	216
十八章	宿谷氏、事蹟集成の事……………	224
十九章	宿谷氏、二・三の事蹟……………	232
附足り	239	
附一章	南北朝期の宝篋印塔の事……………	241
附二章	山根神社と御神体の事……………	245
附三章	大谷木原合戦並に毛呂合戦の事……………	251
附四章	国土調査に思う事……………	268
附五章	竜谷山城の一考察……………	274
附六章	山根神社出土品の事……………	295
附七章	大谷木家文書の事……………	310



宿谷氏系図 (編者追記) 337
 編集後記 342



附八章 まぼろしの伝承…………… 330

本書は毛呂山郷土史研究会発行の「あゆみ」に掲載された山口満の論文をまとめたものである。編集にあたっては次の修正・追加を行った。なお、配列順は「宿谷氏の賦」「附足り」とも発表年順とした。

- 一、前後関係から明らかに同音異字などの誤植によるものと思われるものは修正した。
- 一、西暦年を和年号に続き（ ）で追加した。また氏名の「工門」は原則「衛門」に直した。
- 一、句読点は、読み易くするため最低限の修正を行った。
- 一、適宜関連写真を追加した。また必要に応じて補足説明を、文章中または文章末尾に「」内で行った。
- 一、原文のルビ（振り仮名）はカタカナで示した。また新たにルビを追加する場合はひらがなとした。

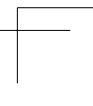
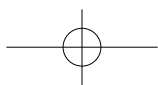
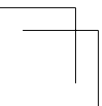
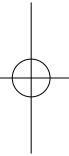
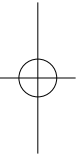
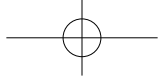
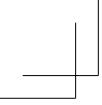
宿谷氏の賦

宿谷氏は武蔵七党の児玉党より端を發し、鎌倉幕府の御家人として活躍した名族であつた。

その本貫地は埼玉県毛呂山町大字宿谷、爾來七百有余年……



宿谷七騎出陣図（杉田鐘治氏画）



一章 町史外宿谷氏の賦

(あゆみ第5号 昭和54年)

一、前書きのこと

武蔵七党の一つ、児玉党より端を発する宿谷氏に関しては、長年の懸案であった毛呂山町史に詳述されているので、今更、筆者が述べるまでもないと思われるし、何となくおこがましくも感じられるのだが……。

町史は、あくまでも毛呂山町の正史で永遠に受け継がれることと思われ、又、受継がれなければならぬが、宿谷氏に関しては町史に記述されている以外にいくつかの事績が語り伝えられているので、町史の外史的な立場から、主として云い伝えを中心に若干の私考を折込み、又、今年のNHK大河ドラマ「草燃える」と同時代に活躍した宿谷氏にスポットをあててみた。云い伝えについては私の祖父、及び、宿谷氏祖母から伝え聞いたもので、町史とは若干の矛盾があると思われるが、地元の云い伝えは云い伝えとして、後世に伝えられてもそれなりの意味があると思われるし、そこには宿谷氏累代のゆかりある過去の人達のはかないロマンが流れて居ると思いついた。稿を起した訳である。

始めにお断りしておくが、決して町史に反論するつもりはないので、町史を読んで参考にしていただく程度のものである。

二、宿谷氏出自と系図の事

宿谷氏の出自に関しては、すでに町史に記述の通り、武蔵七党中、児玉党より起っていることが明

らかであるが、宿谷氏の系図書に関して町史は、大谷木本、葛貫本^{つづらぬき}、浅羽本、を参照して記述されて居られるが、この内、大谷木本〔口絵写真参照〕、葛貫本は、江戸時代中期（元文中）宿谷氏一門によって、原本、武蔵国藤原姓児玉流宿谷氏系図より、それぞれ分写されたものと云い伝えられている（この時の立合人が私の六代前の久左衛門）。〔久左衛門は天保十四年（一八四三）十一月没〕

この原本は、宿谷氏宗家と呼ばれる宿谷義夫氏家（大正頃廢家、末孫北海道）に、一口の黄金作り
の太刀、一幅のまんだらとともに秘藏されていたものであると云い伝えられている。

浅羽本に関しては、城山城主、浅羽宿谷氏の古屋敷（葛貫）をあずかっていた旧臣、福田の太郎の子孫が長くあずかり保存していたもので、明治初年、旧主家、葛貫宿谷氏に返上されたものといわれる。あゆみ四号〔昭和五十三年〕に、村本先生〔毛呂山町史編さん委員長、村本達郎氏〕が「まぼろしの郷土史料を探す」の中に、宿谷氏系図について「日蓮教団全史」に記述の同氏系図が、比企郡の某町において発見されたとあるが、この系図は比企郡小川町か、玉川村あたりに、同氏の一族もしくは親族が居住（住所不明）して居るので、おそらくその人達が所持していたものと思われる。ということは、近世初期、宿谷荘から同氏道重の一子、重右衛門重安が、大谷木、森田に分知（里人は森田宿谷氏、又はお代官と呼ぶ）したが、この森田宿谷氏から、江戸中期さらに二家、近くに分家がでているが、そのうちの一家が、江戸末期に比企郡玉川郷辺へ移住していることが明らかになった。同家が分家の際、大谷木本同氏系図を筆写し所持していたものが、村本先生の云われる「日蓮教団全史」に記述の比企郡の某町において発見の同氏系図ではなからうか？ 明治中期頃から森田宿谷氏の墓地が私の家の所有地となつて居り、昨年同氏直系の方から同墓地返還の依頼があり、墓地整備の折に同墓地内に分家墓地があることが明らかになった。現在年二、三回ほど墓参に見える。

大谷木本、葛貫本、ともに原本からの分写であると伝えられるし、この一家の移住地が比企郡玉川郷辺であることから何となくうなずける様な気もするが。明治初期、原本系図をめぐって、同氏一族の激しい確執が起り、私の曾祖父も宿谷氏執事の家であったので、この確執に巻き込まれているが、同氏の軍忠状〔合戦の功績を書き上げ上申した文書〕も同時に行方不明となっている。江戸初期の頃の同氏系図〔葛貫本〕をみると、「行勝 南方宿谷勘左衛門」とあるが、成木村（現青梅市、成木）に宿谷姓を名乗る家が数家あるが、勘左衛門行勝が、成木村に住しその子孫であるといわれる。又、浅羽宿谷氏の名績を継いだ、権左衛門重本の次男尹行は、おち尹宅の養子となり江戸宿谷氏を継ぎ、石高、百三十石にて、名を、左門尹行と改め、江戸幕府の旗本に取立られたと伝えられる。

前述、宿谷一門による系図をめぐっての確執を、宿谷家系図騒動と呼んでいる。

三、宿谷氏とまぼろしの名刀小狐丸の事

平安末期の頃、この地の在地土豪として土着した宿谷氏も、当時の土豪達がそうであるように、しだいに武門としての道を歩み始める様子が同系図をみるとよくうなずける。武門の家に欠くことのできない、家重代の郎党、武具類等、があるが、これに関する云い伝えも、しばしば耳にするものであるが、本町においても、滝ノ入の大野氏の佩刀と伝えられる烏丸、平山の村田氏所持の一字の太刀等がその例であろう。

治承四年（一一八〇）、鎌倉殿の御家人となった宿谷氏にもその例がある。承久三年（一一二二）鎌倉政権と公家政権とが正面武力衝突を起した、いわゆる「承久の乱」に、宿谷太郎重氏が戦功の恩賞として、時の執権、北條義時より三條小鍛治宗近作なる黄金作りの太刀、小狐丸を拝領した。後に、

この太刀と、原本宿谷氏系図、日朗上人直筆と伝えられる、まんだら（後述）の三品を宿谷氏累代の重宝として明治初年まで、宿谷氏宗家で所持していたと語り伝えられている。この三條小鍛治宗近の小狐丸は周知の方も多いと思われるが、この宗近は、平安朝の頃、山城国、京三條に住み、三條小鍛治と称し、一条天皇より御剣を打つよう勅命を受け、京伏見稻荷にこもり祈願をこめたところ、白狐が現れて向う鎚をつとめ、名剣、小狐丸を作り上げることができたと「謡曲小鍛治」はじめ長唄、歌舞伎などによって広く知られているが、そういう伝説まで生れたほどの名匠であったと伝えられる。刀剣史上でも、伯耆安綱とともに、日本刀の始祖といわれている。宗近作なる太刀、しかも名物ともなっている小狐丸をいかに抜群の手柄があったとはいえ、これを宿谷氏が拝領するということは一概には信じがたい様な気がするが。ちなみに当時の有名な武将の佩刀をあげると、畠山重忠が古備前三平の一人高平を、富士の裾野の討人で有名な曾我兄弟のうち弟の十郎祐成が同じ三平の一人助平を、和田別当義盛がやはり三平の一人包平を、源義経が古備前友成を、最明寺入道時頼が粟田口国綱の鬼丸を、それぞれ愛用していたといわれる。

宿谷氏の重宝といわれるこの黄金作りの太刀は、明治中期頃まで確実に実在していて現に私の祖父は経眼しているというし、先年、大谷木の山根神社本殿からこの太刀に関連ありと思われる木札が発見された。木札は、明治中期、宿谷の白山神社が合社された際に、山根神社に移されたものであるが、それによると、木札の右に相州鎌倉郷長谷、中央に伏見稻荷大明神、左に山城国三條住宗近と書かれているのを経眼している。木札の右の文は宿谷氏の鎌倉での館趾であり、中央の文は前述の伏見稻荷の祈願であり、左は宗近の在名を意味するものと思われる。とするとこの太刀が名高い小狐丸であろうか？あるいは、小狐丸でないにしても、宗近作の太刀であったのではなからうか。無銘であった

か銘であるか不明であるが、在銘であれば、三條もしくは宗近とあつたらうから、後世、宿谷氏がこの太刀を小狐丸と呼んだことも考えられなくもないが。長さ二尺六寸三分、生ぶ中心なかごには宿谷入道これを所持と、所持銘まであつたと語り伝えられている。

明治中期、やはりこの太刀の所在をめぐって、宿谷氏一族の確執があり、これを里人は「小狐丸騒動」と呼んでいると聞く。宿谷氏一族と私の祖父以外に経眼したのも居らず、今もってその所在がようとして知られず、まさにまぼろしの名刀としてふさわしいものであるが、つい最近、宿谷入道これを所持という重要文化財に指定された太刀が実在していることを耳にしたので、もし実在であれば云い伝えが裏付されることになる。

是も最近聞いた事であるが、小狐丸とは別に宿谷氏愛刀のことである。多分、宿谷氏の関係と思われるが、天正十一年（一五八三）四月、宿谷七郎左衛門尉が、賤ヶ岳の合戦の折に用いたという一口の太刀が本町に実在しているとの事である。この合戦で宿谷七郎左衛門尉は、秀吉麾下のいわゆる賤ヶ岳七本槍の一人、糟谷助右衛門に討取られているが、討死後どんな経路で本町にあつたかつまびらかでない。

四、宿谷氏とまんだらの事

宿谷氏累代の重宝としてすでに、系図と宗近の太刀のことを述べてきたが、ほかに、一幅のまんだらがある。同代の家伝によれば、このまんだらは鎌倉幕府の寺社奉行であつた宿谷左衛門尉光則が、日蓮上人法難の折、弟子の日朗上人を自邸の土牢にかくまい、日蓮の教えに深く帰依し、日朗上人より拝領したもので、同上人の直筆とされている。現存していて私も経眼しているが、すゝぼけて文字

著者略歴

山口 満 (やまぐち みつる)

1933年 埼玉県毛呂山町に生まれる
2013年 死去

埼玉県農業会議常任会議員
埼玉県農業大学校運営企画副委員長
同大、非常勤講師 同大、同窓会長
入間郡農業委員会副委員長
毛呂山町農業委員会会長
同、歴史民俗資料館協議会副会長
旧、毛呂山町農業協同組合理事

埼玉県郷土文化会
毛呂山郷土史研究会会長
同、町史研究会
同、愛刀会幹事

◆著書

『折々の言の葉』（2011年・まつやま書房）

宿谷氏の賦 復刻版 毛呂山の名族 宿谷氏の事績

2014年3月10日 初版第一刷発行
2023年8月20日 復刻初版第一刷発行
著者 山口 満
編者 山口正義
題字 井上健次（毛呂山町長）
カバー絵 「宿谷七騎出陣図」（杉田鐘治画）
印刷 株式会社日本ワントゥワンソリューションズ
発行所 まつやま書房〔発行者：山本智紀〕
〒355-0017 埼玉県東松山市松葉町3-2-5
Tel.0493-22-4162 Fax.0493-22-4460
郵便振替 00190-3-70394
URL:<http://www.matsuyama-syobou.com/>

©MITSURU YAMAGUCHI
ISBN 978-4-89623-205-9 C0021

著者・出版社に無断で、この本の内容を転載・コピー・写真絵画その他これに準ずるものに利用することは著作権法に違反します。乱丁・落丁本はお取り替えいたします。定価はカバー・表紙に印刷してあります。